５．アユの友釣り技術

－　アユを釣るために…　－

鈴子陽一　（アユ釣り名人）

アユの友釣りは江戸時代に始まったと言われている。世界的にも類を見ないアユの習性を利用した特殊な釣り方。おそらく、川を見て縄張りを持ったアユが他からの進入アユを体当たりして追いまくったのを見て考え付いたのだろう。

狩野川が発祥の地とされ、狩野川のアユ漁師達が当時は非常に貴重で高価だったアユを求め、全国の河川を廻り歩き友釣りを広めていったと思われる。

当時の仕掛け、技術は今のそれと比べ、驚くほどの違いがあったと思われる。ただ、昔の河川環境は今とは比べようもなく良好であり、天然遡上のアユで川が溢れていたと考えられ、釣果はそれなりに十分だったと思われる。

しかし、近年においては、その道具、仕掛けは、目覚しい変化を遂げた。それに伴って釣り方（テクニック）の進化も激しく行われてきた。泳がせ釣り、スパイラル、イナズマ、引きずり、止め釣り、ｅｔｃ…と様々な人々により提唱されてきた。

それと同時に、釣り道具の変化も目覚しいものがあった。糸は、テングスの時代からナイロン糸に変わり、どんどん細くなり金属糸が出現し、今は金属とナイロンの複合の糸が使われている。今後は環境にも対応した更なる新素材が開発されるだろう。私が始めた頃は（４３年前）ナイロンの０.６号の太さが普通であった。それが今や０.０５号と当時では考えられなかった細さになっている。

あくまでも、オトリに負担をかけないため、自由に泳がせるための進化である。

さらに、ハナカンもワンタッチの時代、背針もそれぞれ目覚しい進化を遂げた。

釣り道具、仕掛けの変化はアユそのものの変化と同時進行で行われてきた。天然遡上アユだけだった時代から、放流魚全盛時代、海産、湖産、人工アユが蓄養され、全国に放流され、冷水病という大変な弊害も起こった。そのためか、本来のアユの習性が大きく変化し、友釣りにも多大な影響を与えた。縄張りを持たないアユたちの出現である。群れてトロ場にしか居ない、いわゆる群れアユ、なかなか追わないアユの出現である。

このアユをどう釣るか、それが最近の友釣りの大きな課題となっているのでアル。